

新潟西部地域 「新之助」生育情報 No.3

令和 8 年 7 月 30 日
巻農業普及指導センター

◎ 出穂早まる！2 回目の穂肥を遅れずに施用 ◎ 葉色を確認！追加穂肥は葉色が淡いほ場のみ

【7月30日の生育データ(指標値比較)】

○予想出穂期：8月9日頃（5月中旬植え）

○草丈「並」、茎数「並」、葉数「やや遅い」、葉色「やや濃い」

区分	調査地点	移植日	草丈(cm)		茎数(本/m ²)		葉数(L)		葉色(SPAD)	
			本年値	指標比 %	本年値	指標比 %	本年値	指標差L	本年値	指標差
分施	岩室(普及)	5月16日	76	99	530	118	13.9	0.3	34.9	0.9
全量基肥	巻	5月15日	81	105	462	103	12.8	-0.8	36.9	2.9
	岩室	5月6日	78	101	521	116	13.0	-0.6	36.1	2.1
	潟東	5月10日	79	103	376	84	13.0	-0.6	34.8	0.8
	中之口	5月10日	87	113	433	96	13.6	0.0	33.8	-0.2
	黒埼	5月11日	82	106	372	83	14.0	0.4	38.6	4.6
	西川	5月17日	75	97	542	120	12.5	-1.1	35.4	1.4
	にいがた西	5月7日	78	101	422	94	13.2	-0.4	32.2	-1.8
全体平均		5月11日	80	103	457	102	13.3	-0.4	35.3	1.3
指標値		5月15日	77		450		13.6		34.0	
近年値		5月13日	80		427		13.2		33.9	

・調査地点：JA新潟かがやき「越後中央」新之助研究会、JA新潟かがやき「みらい」新之助栽培研究会、普及センター
気象感応ほ調査データ

・近年値はH29～R7までの平均値

【今後の栽培管理】

※ 今年の出穂前の葉色は、指標値並～やや濃い。色の濃いほ場や出穂期以降の遅い施肥等は玄米タンパク質が残りやすくなるので、必ず葉色を確認し、適期適量を施用する。

(1) 分施栽培の2回目穂肥

○2 回目の穂肥は出穂期の12～10日前に施用する。出穂が早まっているため、葉色を確認し、下表をめやすに施用量を決定する。

施用時の葉色 (SPAD値)	32.0未満	32.0～34.4	34.5～36.9	37.0以上
施肥窒素量(kg/10a)	1.5	1.0	0.5	施用しない

(2) 追加穂肥(分施栽培の3回目、全量基肥栽培の追加穂肥)

○出穂期3日前（かつ、2 回目の穂肥から1週間後以降）の止葉の下葉のSPAD値が34未満で、登熟期間の高温が予想される場合は、窒素成分1kg/10a以内で施用する。

※玄米タンパク質含量率の基準値を超えないよう、遅い時期の追肥や過剰な施肥にならないよう留意する。

(3) 水管理

- 稲体が最も水を必要とする幼穂形成期から出穂・開花期に水が不足しないよう、**飽水管理を徹底**する。
- 飽水管理は出穂期25日後まで継続する。
- 通水期間が出穂期25日後より早く終わるほ場は、最終通水日に深く湛水し、そのまま自然落水して飽水状態とする。
その際、暗渠は閉め、落水が早まらないようにする。
- フェーンの発生が予想される場合は、稲体の急激な蒸散を防止し、出穂前の稲体活力の低下を防ぐため、**速やかに湛水**する。終息後は、ほ場の水温上昇を抑えるため**水の更新**を行う。

～飽水管理のイメージ～

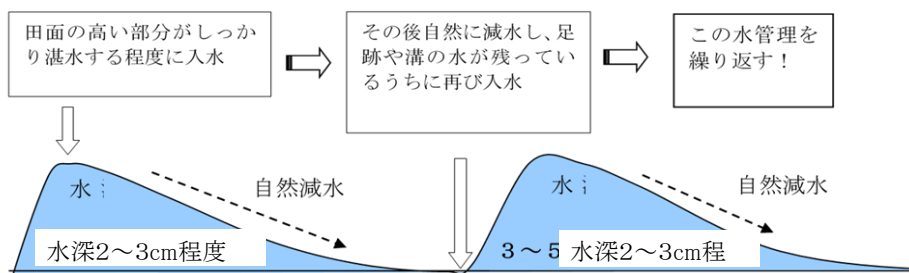


写真 飽水管理で水田の「足跡に水が残っている程度」

(4) 病虫害防除

ア. いもち病

- 液剤、粉剤による穂いもち防除を適期に確実に実施する。
1 回防除の場合は出穂期、2 回防除の場合は出穂期直前と穂揃い期に施用する。

イ. 斑点米カメムシ類

- ほ場内の薬剤防除を穂揃い期に実施する。7 月末～8 月第 2 半旬に共同防除によりカメムシ防除を実施したほ場でも、発生状況によっては追加防除する。

農作業時は水分補給や暑い時間帯での作業を回避する等、熱中症対策をしっかりと行いましょう！